

モンスター(な)ハンターが行く

夜と月と星を愛する者

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある世界に英雄がいた

その英雄は最強だった

その英雄には3人の弟子がいた

その英雄はハンターだった

その英雄は忽然と姿を消した

その英雄の名は

『リユート』

最強にして無敵、救世主にして霸王、神殺しにして神の眷属

その者は

「ああ、恋人欲しいなあ」

ただの前世の年齢＋今世の年齢＝彼女いない歴の

「＝（リユートさんの彼女になりたい）＝」

鈍感やろうであった

目次

再会	43
記憶	37
憧憬	30
神殺し	21
到着	12
転生	1

## 転生

初めまして。

……ん？お前は誰だつて？……

俺はただの転生者だよ

いやあ、驚いたさ道を歩いていたら上から鉄骨が降ってき初めましてそのまま御陀仏……だと思つたら、神を名乗る白いワンピースを着た紅い目の少女に出会つてな？

「すみません。実はまだ貴方は死ぬ運命じゃなかったんです！こちらの不手際で申し訳ありません。代わりに好きな転生させて特典も与えますから妹を恨まないでください……」

まあ、こんな感じで言われてな？転生させる世界はあの有名な狩りゲーのモンスターハンターの世界にして特典は俺がしていたモンスターハンターのゲームで今まで手に入れたアイテムと武器を頼んだ、これでも俺は廃人と呼ばれるほどやり込んで武器は粗方集めて、プレイ時間はもちろんのこと999時間を超えていた

で、転生したら……まあ、転移ではなく転生だから赤ちゃんからスタートですよ？……あ、母親は青髪の絶世の美女で父親はこれまた白髪の超イケメン……リア充滅びろ……え？親だろつて？リア充は滅ぶべし慈悲はない!!

しかも、10歳になった時にふと、あの神を名乗った少女つて……あの祖龍なんじゃ？……と思つたら翌日には鍛えている場所の森にある開けた場所にあの時の神の少女と黒髪の眠そうな少女、そして母親に負けず劣らずの紅い髪の美女がいました

いやあ、あの時は「あ、これ死んだわ」っと思つたけど、どうやらただのうまくやっていけるかを確認しにと謝罪しにきただけだった

どうやら俺を手違いで殺したのは黒髪の少女で、寝惚けて殺しちゃつたらしい……寝惚けて殺されるつて……

で、まあ謝られたけど、俺は前世では家族は既に他界していて、生きる意味を見出せないまま生きていたけどこの世界に来て、楽しくて

世界が輝いて見えるくらいだからむしろ感謝してる。って感じで伝えたら何か事線に触れたのかそれからちよくちよく俺を訪ねにきた、因みに特典のアイテムと武器を入れたボックスなんだけど、俺が1人で旅立ってドンドルマに居を構えたら翌日に部屋に置いてありました、今までは鉄刀で頑張ってきましたよ

あ、そうそう。俺の体のスペックはゲームのハンタークラスらしい……つまり、どれだけ高い所から落ちてても無傷、モンスターから突撃食らったり噛まれても回復薬を飲めば治る……突撃はアプトノスで噛まれるのはランポスで実体験しました、だが普通に怖いです。だから防具は回避性能や高級耳栓が付いた防具しかほとんど着ません。回避チキンですよ？何か？

あ、もちろん狩技やモンスターハンターFでの超越秘技と六華閃舞ができました、はい

………やらかしましたよ。どうやらこの世界にはそんな技も技術もないそうです。

つまり、何が言いたいかと言うと

人外認定されてました？（？o？）／

ハンターになって半年なのにもうG級になってました、どうやら俺以外にG級は2人しかいないらしく、それでもその2人は俺の足元にも及ばないらしいです（その2人はG級になるのに30年近くかかったそうです）

いやあ、お陰でクエストの難関なのは俺に回ってくる。帰ってきたら次のクエスト、次のクエスト、次のクエスト、次のクエスト、次のクエスト、休んでください、次のクエスト、次のクエスト、次のクエスト、次のクエスト……俺はモンスター相手の決戦用兵器か何かなんですかね？

古龍は一体どれくらい倒したかわかんないですよ……あ、一部の古龍とは仲良くなりました、大海龍とか、煌黒龍とか

今じゃ、歴史上初のハンターランク999ですよ……モンスターなハンターとはこういうことなんですかねえ？……ラージヤンと殴り合ったり、ディアブロスと横に並んで走っても余裕で追い越したり……自分で自分が怖くなったよ

そうそう。俺、弟子をとつたんですよ。2人の男と1人の女の子です……それぞれが大剣、ランス、片手剣なんですよ。この子達を起点にして、この世界に狩技や技術を教えていきたいですねえ

(。▽。) キングクリムゾン！

弟子をとつて何年ですかねえ？彼らも既にG級になって、女の子は綺麗な女性になって、よく男に言い寄られるのを見ますねえ。何故か俺の腕をとって抱きつくんですけど、男たちは最初は恨めしそうな顔を見るんですけど、すぐに敗北した感じの顔になって逃げるんですよえ……モンスターなハンターは伊達ではない!!……悲しい……彼女達も早く結婚したらどうだい？と進めるんですけど、「やれやれ、これだから女心のわからない師匠は」と言われたり顔を赤くして怒るんですよ話を聞いてくれないし……それと、女心がわかってないって仕方ないじゃないですか、前世の年齢+今の年齢||彼女いない歴ですよ!!独身王ってあだ名が付きそうです。

男の方は1人は武人氣質で常に己を高めて、もう1人は……あれですね……リーダー氣質なんですけど、2人が自由というか、自分の欲

のために動くからよく彼が損をしていて苦勞してますね。よく愚痴を聞いて俺特製の胃薬と元氣ドリンクコ渡してます。これでも色々な事に手を出してるんですよ？

他にも弟子も大分増えましたし。ギルドからも感謝されましたよ。ハンターの質が上がって、死亡率が格段に下がったそうです。で、今俺はどこにいるでしょうーか？

こつこでーす！ここ、ここ！（イ〇ト風）

え？文字じゃわからない？…考えるな！感じろ！

おほん…で、今いるのはですね…古塔の頂上です

「久しぶりですね。リユートさん」

はい。G級ハンターで、最強で不死身な『超越者』というあだ名が付いたハンターのリユートです。今更ながらに俺の名前だしましたね。それと今喋ったのはこの世界に俺を転生させてくれたミラールツことミラさんです

「久し…ぶり…リユート」

そしてミラさんの後ろに隠れてちよつとオドオドしながら喋ってるのは黒龍のミラボレアスことアスちゃんです。可愛いですよ。でも隠れないでください嫌われてるんですか、俺？…悲しい…

「全く、最近は俺達と会ってくれないから寂しかったんだぜ？」

俺に肩に手を回してきて喋りかけたのが姉御的なFateのモードレッドみたいな喋り方をするのは紅龍のミラバルカンことルカさんです。つい姉御と呼びそう。前そう呼んだら無言の火球が飛んできました、それとそんな近くに寄らないでください、貴方のその豊満なお胸様ががががががが

「で、なんで、呼んだんですかね？朝起きたら机の上にこれが会ったんですけど…」

心を一瞬で切り替えて俺は懐から一通の手紙を出した、差出人はミラと書かれていて、古塔に来てくださいと短い文が書いてあったんですよ

「それはですね……そのお……」

珍しい、ミラさんがここまで言い激むなんて

「……すう……はあ……よし……実はですね。リユートさんを別の世界に転移させることが決まったんですよ」

え？

「え？」

どういうことだってばよ？まるで意味がわからんぞ！

「実は古龍達の会議がありました」

そんな会議があったのか

「リユートさんがいますと、この世界のモンスター達が狩り尽くされて、不味い事になりそうなんですよねえ」

ああ、そういえば、ギルドのお偉いさん達が俺にモンスター達を駆逐してくれる話があったな……もちろん断りましたよ？

「でも、俺の弟子たちは」

「あ、その点は大丈夫です。彼女たちは立派なこの世界の住人ですの  
で、限界もありますし、狩れないモンスターもいます。私たちとか」

俺も貴方たちには勝てるとは思いません

「だから、転移だど？」

「はい」

俺はミラさんに少し考えさせてくださいと言うとその場で考え込んだ

確かにモンスターたちはこの世界の大事な生物だ、人はモンスターから取れる資源で成り立っているとところもあるし食物連鎖にあるように草食動物を食べる小型の肉食がいて、その草食動物と小型の肉食動物を食べる大型の肉食動物がいて、その大型の肉食動物を食べる更にでかい肉食動物（ラヴィエンテ）がいる。つまり俺がいると弟子達に技術を教えて、その技術によって狩られるモンスターが更に増えるつまり人間たちの脅威となるものが消えて、俺の前世のような世界にな



る……前世の世界のように大気中にガスなどの害となるものが漂って、体を壊す人が多かったんだよな。かと言う俺もその1人だったし……よし

「ミラさん」

「…はい」

俺がその提案を断るかもしれないと思って少し不安なのか、顔が暗い

「その提案を受けます」

「!!ありがとうございます!」ペコリ

ミラさんが輝かんばかりの顔で俺に頭を下げながら礼を言ってきた、その長い白くふつくしい髪が揺れる

「…よかつ…た」

「ああ、断ったらどうしようかと思っただぜ」

その断ったらどうしたんですかねえ?俺を……おお、体がブルブル震える

「では、善は急げですね!今すぐに転移用の陣を出します」

「あ、でも弟子たちに」

「あんないやらしい牝がいるところにリユートを置いときたくありません」ハイライトオフ

……え?

「いえ、彼女達にはちゃんと記憶を消すようにしますので大丈夫です」

よかつた、ただの俺の聞き間違いだよな!うん!この中身も容姿も素晴らしいミラさんがそんなこと言うわけないよな!

「……そうですか、せめて両親と妹には伝えて起きたいですけど、悲しませたくないからちゃんと言葉を消してください」

これは両親や弟子達からしたら俺のことを忘れるのは嫌なのかもしれない…だけど、もう2度と会えない俺を考えるより記憶を消して忘れさせた方が幸せだろうからな……彼女達にこの世界の最強のハンターの座を譲ろう。そして父さん、母さん、今までありがとうございました、妹が立派な女性になるようにちゃんと育ててください

「ああ、その転移する世界にはこの世界のお金は使えませんか?」

「ええ、使えません」

「それなら俺が持つてるお金は俺の家族と貧しい子達にあげてください」

「(本当に優しい人ですね。だから私たちはリユートさんを……)……わかりました……はい、陣の準備ができました」

ミラさんがそう言うのと、古塔の中央にわからない文字が書かれた陣ができていた

「今までありがとうございます、あつちの世界でも頑張ります」

「「え?」」

「え?」

「私たちも行きますよ?」

は?

「さ、行きましょう!」

そう言っつてミラさんは俺の手を取り陣の真ん中に立った、すぐ近くにアスちゃんトルカさんもいる

「ちよ!?!心の準備が!」

「大……丈夫……私たちがいる」

アスちゃんが俺の手を握りながら自信げな顔で言ってきた

ああああ!!!陣が光った!!目が!目がああああ!!!

目を開けるとそこは見知らぬ平原だった

「はっ！」

「あ……この世界、神の力使えませんね。ていうか、使えないということ  
を忘れていました……」

「おいこら、じゃあどうすんだよ。てか、この世界なんだよ」

「私も知りません。ただ私以外にも神々が降りてきている世界だとい  
うことくらいしか知りません」

……ミラさん以外にも神が降りてきている？……つまり、ミラさ  
んクラスの神が数多いと……マジ、ヤバくね？（何処ぞのドラゴン  
風）

「……（この世界に転生者いますね。しかも好き勝手やってるそうで  
すし……まあ、リユートさんにはあのアイテムボックス以外に色々特  
典あげましたから大丈夫ですね！）」

そんな重大な事をミラが考えているとは知らずにリユートは別の  
事を考えていた

「あ、そういえば」

「どうしました？」

「アイテムボックスは？」

そう、俺が血と汗と涙と、時間を沢山かけて集めた様々なアイテム  
と素材と武具が入ったアイテムボックスがなかったら俺は泣く

「ああ、それなら」

さっきまで何もなかったのにまるで最初からあったようにアイテ  
ムボックスが出てきた

「この程度の神の力なら大丈夫なようですね」

……そういえばこのアイテムボックスつてもはやボックスじゃな  
いんだよなあ。箱の中は真っ暗だし、欲しいと思ったり出てこいって  
思いながら手を入れると手に掴んでるからなあ。流石モンハンの世  
界！摩訶不思議だな！

「あれ？そういえば、アスとルカがいませんね？」

「そういえば……」

俺らが2人を探していると

「おーい！」

突然、ルカの声が聞こえた、俺たちが声の方を向くとそこには

「いやあ、なんでかここにまだ使えそうなのに捨てられた馬車があったんだよ」

「…ブイ」

アスちゃんが可愛く手でブイってしながらこちらを見てきたので

「ありがとうアスちゃん」

アスちゃんの頭を撫でた、因みに黒髪に隠れて小さな角があるぞ

「ん……………」

「……………」

……………2人がこちらに目を向けてきていた

「ん？どうした？」

「……………いえ、なんでもありません……………鈍感」

最後の方はちゃんと聞こえたぞ、俺は鈍感キャラじゃないのだ！

……………ということでもミラさんの頭に失礼

「きゃー！リュ、リュートさん!?!」

おうおう、赤くなってる赤くなってる

「いや、して欲しそうだったんでな」

「わ、私はして欲しいだなんて一度も……………」

「ならやめるか」

俺が頭から手を離すと手を掴んできた……………いたいいたい、力強いんですが、ちょ！折れる折れる！

「…リュートさんは意地悪です」

この後、2人をめちやくちや撫でた

《オラリオの黄昏の館》

そこに黄金の鎧を着込んだ金髪に紅い目をした、誰もが見惚れる男がおり。通路を歩いていた

「フハハハ!!ほら!早く来い!」

その男の背後には首輪をはめた女たちがいた

「うつ……」

「あ、アイズさん。大丈夫ですか?」

「大丈夫、ありがとう。レフィーヤ」

「クツ……この私が奴隷のような扱いを受けるとはな」

「でも、誰もあの人には逆らえないよ。オツタルですら彼には勝てないんだから。ギルドも前に彼の討伐隊を組んだけど、みんな返り討ちにあつて、沢山の人が……」

「エイナの言う通り……あいつのスキルの金色の波紋から出てくる武器の一つ一つが凄い力を秘めてるからな……しかもあいつ自身もオツタルを超える身体能力ときた……だからフィンたちもあれ程の怪我を……」

女たちがこそこそと話していると

「おい!何をボサボサしている!来いと言ってるだろうが!!」

男が、荒々しく怒鳴ると女たちは肩を萎縮して、ゆっくりと歩みを始めた

「ツ……」

「うう……この首輪がなかったら……」

「誰か……誰でもいいから……助けて……」

その声は虚しく空間に溶けていった……彼女たちが助かるのはそう時間がかからない。英雄であり神殺しである者がこのオラリオに向けて足を進めている

「は！今、無責任に何か重大な事をさせられる予感がする！」↑直感B  
+

……進めている!!

## 到着

ガタゴトガタゴト

はい、みんな大好き……嘘ですすみませんモブは黙つとききます

「何を言ってるんですか？」

「いや、何でもないです」

改めて、元ハンターで今はオラリオに足を向けて馬車を走らせてる……そう。走らせてる……つまり俺が馬車を引つ張つてます。俺より強いと言つてもミラさん達は女性だからね。こういうことは任せられません！……おっと、話がズレた、で今は冒険者というものになる為にオラリオに向かつてます……まあ、俺たちは今は無一文なので、冒険者になるのは無料なようなので、冒険者になってある程度お金が貯まったらそのまま何処かで田舎暮らししようかなと思つてるリユートだよ☆キラッ

うん、キモいな

まあ、3人乗せた馬車程度なら軽い軽い……これでもグラビモスのがしかかつてきたから持ち上げるほどの力はあるよ！モンスターなハンターだからね！

幸いアイテムボックスに食料とか入っていたから問題ないです。肉と魚と薬草やアオキノコとかを食べてます。このまま行くと明日には着くらしいです

……あ、そうだった、俺がミラさんたちと別れて森の中を探索していたら途中で剣を見つけたんですよ。なんか薄い円形の岩に突き刺さっていて、俺が触れると光つて抜けました、ポツケ村のヒーローブレイドを思い出しましたよ。しかもすごい煌びやか、全体的には金色の鍔に刀身は銀色のように輝いていて剣の中央より下部分にある宝石、ただの豪華な剣かと思つたら手に馴染むし切れ味もいい、白くらしいはあるな……鞘がないのが難点だが、オラリオにいるというへファイストス様に頼むか

はい、オラリオに着きました

途中に馬車は置いてきました、持っても仕方ないですし、馬じやなくて人が引いてる馬車とか絵面わるいからね。今はオラリオに入る為に並んでいます

「少ないですね…」

「え？これで少ないの？」

マジで？30人くらいは並んでるけど、少ないのかあ

「100人以上は並んでるんですけど…」

……ミラさんや…貴方はこの世界は初めてではないのか？……え？神だからこれくらい知ってる？……神ってすげえ

「さ、私たちの番ですよ」

「ああ」

私たちの順番になったので門番の前に立ちます……なんか、やけにやつれてますねえ。まあ、人が多いから疲れるのかな？

「…何のためにオラリオに来ました？」

俺が答えときましようか、前日にミラさんに教えられた通りに

「俺は冒険者に、後ろの3人は神です」

「っ！あんた！冒険者になるのか！悪いことは言わん！やめとけ！」

さっきまでの顔は何処へやら…いきなり切羽詰まった顔になりましたね。後ろに並んでる商人達も慌てていますし

「なんでですか？」

俺がそう聞くと、門番は暗い顔で

「……今、オラリオは1人の男によって活気も笑顔も何もないんだよ。前までは市民は笑顔に冒険者達はダンジョンに向かって意気込んだけど、今はそいつのせいで市民は家に籠ってる冒険者達は好き勝手



やっついて……そいつは綺麗な女達を無理矢理、性的に襲って、お気に入り  
の女には付けたら逆らえなくなる首輪を嵌めて側におき、逆らつ  
たら圧倒的な力でねじ伏せる……前にギルドが討伐隊を組んだが、為す  
すべなく負けた、ロキファミアもフレイヤファミリアの主力達も負  
けて、重傷を負ってる」

……胸糞悪いな……

「(リユートさんがキレましたね。彼ってそういうのは大っ嫌いです  
からね。そういうクズを今まで何度も倒して来ましたし……いつ  
だったか、村を襲っていた、女性に性的暴行をしていた盗賊達を殺し  
てましたしね……まあ、その転生者は死んでも問題なさそうですね)」  
俺はな……そういうクズ野郎が大っ嫌いなんだよ……人を人と思  
わず、好き勝手やって他人に迷惑をかけるやつが……前世の俺だったら  
無関心だったが、あの世界で家族に、弟子達に、ギルドの優しい人た  
ちに出会って俺は変わったんだ……

「……そいつの名前は？」

誰だ、そんなことする下郎は

「……ギルガメッシュと名乗ってる」

……なるほど……つまり、俺と同じ、転生者か……同郷の者とは仲  
良くしたかったが、そんなに暴れてるんなら改正の余地もないな

「……そうか」

「……ようこそ、オラリオへ」

門番が俺たちを通して、オラリオ内に入ると

「……本当に活気がねえな」

「うん……誰も……笑顔じゃ……ない……みんな……暗い」

そう、道行く人は誰も笑ってない……どんよりとしており、女性は  
全く見かけない……市場も見ればガラの悪い冒険者達は店の食べ物  
を勝手にとって食べて、店からは冒険者と思われる怒鳴り声が聞こえ  
る……ふざけんな……

「おうおう、にいちちゃん。女と金置いてどっか行きな……ヒイ!」

ミラ達を下品に見ながら俺を脅してきた男を睨むと男は顔を青く  
しながら逃げていった

「ミラ……先にギルドに行くぞ」

俺はミラ達をギルドに行くように促す。前日に恩恵は刻んでる。レベルは1だったけど、誰でもそうらしい。スキルはあったがな

【モンスターハンター】

- ・ 人以外の者と相対する時ステータス補正
- ・ モンスターを倒した時、剥ぎ取りが行える
- ・ モンスターを倒すほど、ステータスが上昇する

【G級ハンター】

- ・ 人の枠を越える

【神殺し】

- ・ 神を殺した者につく称号
- ・ 神と相対した時ステータス補正

【アイテムボックス】

- ・ 容量はあるが、念じれば物を収納できる
- ・ 念じれば所有しているアイテムが出てくる
- ・ 念じれば所有している防具、武器に一瞬で変えられる

【調合】

・ アイテムとアイテムを合わせて、魔力を込めると別のアイテムに変わる

【時空を越えた者】

- ・ 時間を一時的に止める
- ・ 空間に直接関与する事ができる
- ・ 早熟する

【世界を救った者】

- ・ 世界を破壊しようとしたモノを倒した者に付く称号
- ・ 自然からバックアップを受ける

【英雄】

- ・ 神と精霊との間に子を為すことができる
- ・ 悪の属性を持った者に相対した時ステータス補正
- ・ 善の人の為に戦う時、ステータス高補正

【最強にして頂点】

・人が到達できるところまで登った者

・【??】のスキルを条件を満たすと得ることができる

正直なところこのスキルをギルドに提出して良いのだろうか……ミラが言うにはこんな面白いものを他の神々は放っておかないらしい。しかも俺は神殺しというスキルがあるからギルドが危険人物として見てくるかもしれない。

それと、狩技とかはあれは技術であってスキルではないらしい  
さて、なんやかんやでギルドに着いたが

「おい!!なんでこの程度なんだよ!もつと上げろよおらあ!」

「おうおう、金よこせよ、な?俺は金に困ってんだよ……断ったら……どうなるかわかってんだろうな?」

……なんだこの有様は……バルバレやドンドルマでもここまで粗暴なハンターの数が多くなかったぞ……まずは冒険者登録するか  
「すみませんが……」

「ツ!は、はい!な、なんででしょうか!」

……怯えられた目を向けられるのはあの時の密猟者以来だな

「そんな怯えないでください。ただ冒険者登録をしたいだけです」

俺がそう言うとも最初は半信半疑だったが、時間が経つといい笑顔になった

「はい、リユートさんですね……ミラルーツファミリア?新規のファミリアですか?」

ちなみに彼女、ミイシャというらしいです

「ええ、オラリオの外から来ましてね」

嘘は言っていない

「はい、ではリユートさんのステータスを記載している紙はありますか?」

「ありますよ」

俺が長年愛用している絶対に入りきらない量でも入れることができるこれまた摩訶不思議ポーチから紙を出そうとしていると

ガヤガヤガヤガヤ

「ん?なんか急にうるさくなりましたね」

「あ……ああ……エイナ……」

突然、ミイシャさんがギルドの入り口を見つめてガタガタと震えて誰かの名前を呼んだ

「リユートさん……おそらくリユートさんと同郷の者ですよ」

ミラさんが俺に小声で話してきて、俺は入り口を見つめると

「ほう……可愛い子がいるな」

そこには金髪紅眼で豪華な鎧を着込んだ、イケメンがいた……イケメン死すべしと思ったけど、あれはどう見てもFateのギルガメツシユだな……転生の特典にギルガメツシユの容姿と能力を頼んだのか？……だが、門番の人が言う通りならギルガメツシユは近接戦闘はそこまでできなかったはずだ……おそらくもう一つの特典だろうな

「おい、貴様！その女達から離れろ」

俺が考え事をしてしているとギルガメツシユ（偽）は俺に向かってそんなことを吠えてきやがった

「喜べよこの女達、我が直々に貴様達を可愛がってやるぞ、もちろん夜伽でだがな。そのあとは側に置いてやるぞ、フハハハハ！」

………不愉快だな

「気持ち悪いですね」

「近寄ら……ないで……」

「生憎だが俺は好きな人はいるんだ」

ミラさん達がそういうと、ギルガメツシユ……長いからギルでいいや……ギルはミラ達を睨んだ

「女、俺が側に置いてやるよといっているのだぞ、何故俺の言うことを聞かない！」

本性でとるがな………ん？視線を感じる

「……………」

よく見ればギルの後ろには何人かの女性がいるな………うお!?エルフだ！本当に耳が長い！触りたい！竜人族は耳は長いけどあんな形じゃないからな………触らせてくれないかな？

「だから嫌ですと言ってます。貴方みたいな人の側にいるなんて嫌です」

「うんうん」

ミラさんが言い終わるとアスちゃん達が頷いた

「来いと言ってるんだ!」

ギルがミラの手を掴もうとしたので

「やめてくれないか?」

俺がギルの手を掴んだ

「雑種が俺の手を掴むな!!」

お、意外と力強いな…まあ、ラージャンの方が強かったですけどね。

まだまだ弱い

「な、なんでだ!?なんで振りほどけない!!俺はヘラクレスの力を手に入れたはずだぞ!!」

なるほど、ヘラクレスの身体能力も手に入れてたか

「まだまだだな。貰い物の力を鍛えないなんて、勿体ない」

「ツ!お前!俺と同じか!!?」

「正解だ」

正確には別の世界に転生したんですけどね…お?周りの人たちがギルの後ろにいる女性達も目を見開いて驚いてる…こいつの力強さを知ってるからそれでも振りほどけない事に驚いてるのかな?

「ふざけんな!オリ主は俺だ!主人公は俺なんだ!お前のようなモブが俺より強いなんて認めない!!」

完全に本性出しやがったな

「何を言ってるやがる…主人公はお前じゃない。そして、俺でもない…俺たちは異物だ…」

「リユート…」

「…だがな…異物でも、やれることはあるんだよ…だが、お前はやり過ぎだ…」

「ふ、ふざけんな!!!何が異物だ!!俺は主人公だ!!この世界を好きにできる主人公だ!!お前なんか俺の世界を好き勝手ささガハツ!」

ドン!!!

ギルガメッシュはギルドの壁をぶち破って吹っ飛んでいった、ギルドにいた全ての人がその現場を目撃しオラリオにいる人々がオラリ

オの外にある平原に飛んでいく金色の物体を目撃した

「……俺が一番嫌いな人種だ……」

だから殴った、だから吹っ飛ばした、だから……今、決めた……

「オラリオに来て最初にやるのがまさかこんな事になるとは……ミラ……」

俺は今から迷惑をかけるミラに謝らねえと、もしかしたらオラリオに入ることが今後一切できないかもしれないが……

「……はあ……わかりました、正直、私もイライラしてました……だから、私たち……いえ、オラリオに住む人々の為に戦ってください……

『英雄』リユートさん」

「………ありがとう」

俺がそう言うのと、アスとルカが俺に

「頑張……って……」

「俺の分までしっかり殴ってきてくれ」b

そして、ミイシャさんが

「リユートさん……本来ならレベル1の人に頼むもんじやないんだけど……勝ってください……」

ギルガメツシュの後ろにいた女性たちが

「……見知らぬ者に頼む者ではないが……頼む……あいつを倒して……私たちを助けて……くれ……」

綺麗なエメラルドグリーン髪色のエルフがそう言いながら頭を下げてきた……後ろいた人たちも目蓋に涙をためながら頭を下げてきた

た

「……ああ、わかった」

俺の父は言っていた

『ハンターはな……ただモンスターを狩る人たちのことを言うんじゃない……戦う力を持たない人々を助けるのが、ハンターの役目だ……だから、お前もハンターになるなら……人々を助ける……英雄になつてきな……』

………父さん……俺は……英雄になつたさ……同じハンターの者達からは畏怖の目で見られていたが、クエストの依頼主や助けた村の人た

ちからは感謝された……俺はその人々の顔が好きだった……だけど、このオラリオではそんな顔は一切ない……だから……俺は例えみんなから怯えられようが……たった1人……1人から感謝されるならそれでいい……

だから俺は……お前を……倒す

## 神殺し

オラリオから数キロ離れた平原

そこに転生者ことギルガメッシュはいた

「クソがあー！雑魚の分際でえ!!俺のこの体に傷をつけてくれたなあ!!」

側から見たら傷など無いようにみえるが、鎧の中……つまり体の方はある程度のダメージが入っている。リユートはギルガメッシュが着ていた鎧の事を知っておりただの拳じゃあダメージが入らないなら鎧を通して直接ダメージを与えればいいじゃない。とマリーアントワネットに負けず劣らずの謎理論でやってみせたのだ、太刀に纏わせ練気をご存知だろうか？これはその練気を拳に纏わせそれを鎧に当てると同時に拳に纏わせた練気を放つたのだ、このように説明しているがリユートの弟子たちはこれを習得できなかった、それもそうだろう。まず練気は本来太刀に纏わせるもので拳に纏わせようとすると苦難を極める。これはリユートが作った、数多くあるオリジナル狩技『拳武・鱗透衝撃』文字を見てわかる通りこれはリユートが硬い鱗を持つモンスターに有効打を与えるために編み出した狩技だ

「……この世界ではお前に勝てる奴がいなかったから……お前の恐怖となるものがいなかったから、お前はそんなに慢心をし弱く脆く腐ったんだな」

そう言いながらリユートは『アイテムボックス』から天上天下無双刀を取り出して、黒炎王の防具を念じて一瞬で纏う

「な!!?!!その武器と防具は!?てめえ!!モンハンの世界から来やがったのか!!」

どうやらリユートの武器と防具を知っているらしい。それはつまりリユートの前世の世界と変わらない世界から来たということである

「そうだ、お前じゃあ生きることすら過酷なところから来た……」

「貴方は一体どんな所から来たのだ……それにその武器と防具はどこから……」



リヴェリアが話しかけてきた、リユートはリヴェリア達にギルドで待っていてほしいと言ったのだが、彼女達が頑なに拒みこうしてリユート達についてきたのだ、それとオラリオの城壁とオラリオの門の所から数多くの人が見にきている。リユートがギルガメツシュを殴って吹っ飛ばしたことは瞬く間にオラリオに広がりこうして見てきたのだ、そしてミラが言った『英雄』という単語ともしかしたらあの人が彼を倒してくれるんじゃないかという少しの希望を抱いて……

「なに、君達が戦う魔物とは一線を画した生物達と何十年も戦ってきただけだ、それとこの武器と防具は俺の所持してるもので、スキルで取り出しただけだ」

因みに彼の心境は

(ああ、エルフ耳なんじゃあ。触りたいんじゃない)

と、凄く残念なものだった

「ふぎけんな!! あんな所! 俺の力があれば殺戮できる!! してお前ら! なんでそいつの後ろにいやがる!! てめえらは俺のもんだろが! こつちに来い!!」

「(本当、胸糞悪くなる事を言う) …彼女達はお前のものではない」

「「「「ツ……………」」」」」

「なに言ってるんだ!! そいつらには俺の所有物たる証拠の首輪があるだろうが!!」

「(首輪? ……彼女達の首にあるあの黒い物のことか? ……なんか妙な気配を感じるな。気持ち悪くてきみが悪い) …それがどうした?」

「それはそいつらが俺の所有物であり俺に逆らえないようにするものだ! しかもそれは俺以外が外そうとすると頭と体が離れることになるぞ?」

ギルガメツシュがそう発すると後ろの女性達は顔を暗くして、体が震えていた……

「そうか……なら、そういう系の物は太抵持ち主を倒せば外れるな」

リユートがそういうと、彼女達は目を見開いて驚き、ギルガメツシュは……

「……ははははは!! 俺を倒す? ……お前、一度俺に攻撃できたからっ

て図に乗ってんじゃねえぞ?」

「いや、事実を言ったまでだ……俺より力も速さも弱く、相手の力量も知識も経験もないものに負けるほど落ちてねえぞ?」

「てんめえ!!さっきから聞いてれば俺を馬鹿にしゃがって!!」

とうとう我慢ができなくなったのか、金色の波紋が100を超えてそこから数多の武器が顔を出した

「「「ツツツ!!!」」」

「……(レア度で言えば全て6は超えてるな……でも、芸もなくてただ飛ばすだけで、本人はそこまでじゃない。おそらく強すぎる力が身体に馴染んでいないんだろうな……)」

「どうだ?怖気付いたか?だが、今更泣いて謝ったところで許しはしないがな」

「リユート……」

俺の名前をここに来る前に教えたリヴェリアが、泣きそうな助けを求めるような声で呟いた

「安心しろ」

「?」

「頼まれからには……いや、違うな……女性が泣いてるんだ、男が女を泣かせるなんて恥もいとこだ……」

「「「……………」」」

「…なあ、ギルドでも聞いたけどよ。もう一度、聞かせてくれねえか? ……お前達が、今、どうしてほしいか……」

「……を……」

「……………」

もつとだ、心の底から……なにを望むか、俺になにをさせたいか  
「私達……たす……」

言ってくれ……そしたら、それはハンターとして……いや、俺がそれを叶える

「「「私たちが助けてくださいー」」」

「……請け負った」

リユートがそれを聞き、ギルガメツシュを見たとき

「死ね」

黄金の波紋から数多くの武器が俺に向けて放たれた

ドゴゴゴゴゴゴーン  
!!!!!!

「…ふ、呆気ねえな。あんだけ大口叩いといてこのざまか」

ギルガメツシユは気づかなかった、いや煙で見えるわけないのだが、見えていたら少しは違った形になったのかもしれない

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

彼女達は誰一人として、暗い顔をしてなかった、むしろ自信満々な確信的な顔をしていた

シユン…

その時、何かが高速で動き

ブシヤア

ギルガメツシユの腕を切り裂いた

「…えう…：…がああああああ!!!」

ギルガメツシユがそれに気づいた時は既に肩から先が無くなった左腕があつた

「…『いなし・瞬斬』…俺があの世界から来たとき気づいた時点で何故気づかなかつた…」

もちろんこれをやったのはリユートだ、モンハンFの極ノ型を得ることのできる技『いなし』…相手の攻撃、咆哮でいなしをする事そこから派生でギルガメツシユの腕を斬り落とした『瞬斬』といなし突き〃〃を行うことができる。瞬斬は文字通り瞬間的に移動して斬り、いなし突きはドリルのように突きを行い対象の硬い鱗を貫く技だ



ようには思えない。元が弱かったからなのか、それともその強化が施されていけないのか……まあ、気にする必要はないか……バーサーカーとなったからには……生かしておいたら何をしでかすかわからん……なら「殺す」しかないな」

「グルアアア!!!」

バーサーカーが大きく振りかぶって斬りかかってきたから

「(ここだ!) 鏡花の構え!」

さて、ここで問題だ……ラージャンと殴り合ったりグラビモスを軽々と持ち上げたり大英雄ヘラクレスの力をもつともしない者が、狩技というもの……ましてや、相手の攻撃を利用して斬る狩技をしたらどうなるか……

①バーサーカーのみ斬る

②斬れない

③やばい☆

正解は……

ズグシヤアアアン!!!  
!!!

③です

バーサーカーのみを斬ろうとしたらあまり余って、斬撃が飛び、遙か先にある山を中腹より上を真っ二つに斬った

「アガ……ガア……」

もちろん、バーサーカーは肩から股間まで綺麗に切り裂かれ地面に倒れた

「……終わった……そして、やってしまったな」

リユートが空を見上げながら黄昏ていると

「リユートさん！」

「リユートく」

「おい」

ミラ、アス、ルカがこちらに駆け寄ってきた、そして3人は減速せずにごちらに走ってきて

「……え？ちよっ?!…ぐふお」

3人とも同時にリユートに抱きついた……約1名抱きつくではなくお腹に突撃したので、リユートはバーサーカーでも与えられなかったダメージを負った

「よかった、リユートさんが無事で」

「うん…心配…した」

「俺はちゃんとリユートはやってくれるって思ってたぜ」

「さっきまでそわそわしていたくせに」

「な!?ミラ姉!言わないでくれ!」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおお」」」」」

!!!!!!!!!!!!

突然、オラリオから世界に轟かんばかりの雄叫びが上がった

「あれは……」

「リユートさんのお陰ですよ」

「…だが、俺はこいつを…」

俺は真つ二つになつたバーサーカーとなつたものを見る

「それでも、リユートさんは人々のみんなの為に戦つて勝つたんですよ……だから、自分を追い込まず、誇れとは言いませんけど、真つ直ぐ前を見てください。みんな感謝してるんですよ。闇から救つてくれたって…」

「ミラ……」

「むう、私たちのこと忘れてない?」

突然、聞いたことのない……いや、リヴェリア達の声の中で聞いたような声が聞こえてきた

「…いや、忘れていたわけでは……どうやら首輪は外れたようだな」

そう、さつきまで付いていた首輪は跡形もなく消えていた、よく見ればバーサーカーの持っていた大剣も無くなっていた

「ああ、本当にありがとう。言葉では言い表せんが、私たちが……あいつ……から、助けてくれて……ありがとう」

リヴェリアは涙を溜めていたので

「ほら、綺麗な顔が台無しだ……よし、ほらこういう嬉しい時こそ笑顔だろ?」

俺はリヴェリアの目に溜まっていた涙を拭き取った……

「!!?!」

ん?なんか、周りの人たちが驚愕で目を見開いてるんだが……俺なんかしたっけ?

「あ、ああ……そ、そうだな……ありがとうリユート」ニコツ  
「!!?」

この笑顔は……ミラに負けず劣らずの笑顔やでえ、心の闇が浄化されるんじゃないか、

とと、そういえば、鎧着たまんまやったな

「ふう、終わったな」

その時、オラリオの門からこちらに近寄ってくる集団がいた

「し、師匠？」

その中にいた、背の低い金髪の男と、猪人の巨漢は呟いた

「ん？…（この気配…まさか!?） ……ゼリオスとヴェルダーか？」

この時、本来ならあるはずのない邂逅はリユート達を結びつけた、  
これは神も知らない有り得ない再会



## 憧憬

これはある1人の男が見た景色であり

『師匠！今度は何処に行かれるのですか？』

男が見た英雄の背中である

(ここは……一体どこだ?)

ある男が、少し景色が薄い中で、森を1人でに歩いていた

(歩いている?…おかしい、僕はあの男に重傷を負わされて……まさか、天界とでも言うのか?だが、何故僕は歩いている?……これは、誰かの視界なのか?)

いくら考えても分からない思考を繰り返していると、突然景色が切り替わった

(な!?!この魔物は一体!?)

景色が切り替わるとそこには全体的に青い体をしており頭に赤いトサカが生えた魔物を喰らっている緑色の魔物が映った

(グルル…)

魔物はこちらを振り向くとゆっくりとした動きでこちらに向かってきた

「こ、こつちに来るな!」

(この声は……この視界の本人か…僕でもわかる。あの魔物は僕たちが一度も見たことのない魔物で僕でも勝てない生物だと言うことを……じゃあこの視界の主は……ここで…)

「ガアア!」

魔物が大きな口を開けて噛みつきこうとした

「うわあああああああああ!!!」

(避けてくれ!!)

何もできない。声をかけることもできない、だが大声を出した、聞こえなくても……助からなくても……何も出来ない自分に怒りを感じながら

ポ…ピカーン！

突然、目の前に球みたいなのが現れたかと思うと、強力な光で視界を奪った

「(な!?何が!?)」

視界の主と男が同じ言葉を発し、目を開けるとそこには

「……大丈夫か?」

全体的に赤い鎧を着て、背中に見たことのない形の青い模様があるマントを羽織って、銀色の長い剣を背負った男がいた

(ウー…なんだ、僕は…この人を…見たことがある?…いや、見たなんていうものじゃない…もつと、大切な…)

グガアアアア!!!

こちらを向いているせいで、魔物に背中を見せている男に向けて、視界を奪われて混乱していた魔物は噛みつきこうとしていた

(は！危ない！)

「…『桜花鬼刃斬り』」

鎧を着た男は瞬時に振り向くと踏み込んで魔物に向かって2回斬った

(だが、それくらいじゃあ奴を倒せな…)

ザザザザザザザシユ！

ザザザザザザザシユ！

(んな!?)

何が起こったかは男にも視界の主にも分からなかったようだ、それもそうだろう…2回斬ったと思ったら斬った箇所から8回と8回の見えない斬撃が出たのだ、斬られた箇所は頭であり

ゴガアアアア!!!??

魔物も何が起こったかは分からず、たたらを踏んだ

「…新米がいるんだ、早く終わらすぞ…『死神の大鎌』」

鎧の男が呟くと刀身に禍々しいオーラが吹き出し、魔力のようなま

でできた鎌の刃部分が生成され、さつきまで銀色に輝いていた刀は今  
は闇に吞まれたように見える。それはまるで光を吞み込む漆黒の闇  
のように

そこから何も見えなかった、Level6である男をもつてして  
も視界に捕らえられず、気づいたら魔物の体に傷が出来ており、もう  
既に虫の息だった

ガア……

魔物は意気消沈し、目の前に立つ男を見やった……と思ったら突然  
振り向き僕……いや、視界の主に向かって突撃した

「うわー！うわああああ!!!」

ザシユ!

ゴア…ガアア……

ズーンつと音がなり目を開けるとそこには

「……」

こちらに背を向け、魔物を見やっている鎧の男の背中が目についた  
(……この、景色……あの人の背中……)

その景色を見たとき、男は忘れていた記憶……いや「前世」の記憶  
を思い出した

(…師匠…)

すると、突然景色が切り替わり

「それじゃあ、ゴグマジオス討伐を祝って、乾杯」

師匠が鎧を脱ぎ、その素顔を晒した……少し青みがかった白髪で、顔  
は誰もが認めるイケメンである師匠が今回の激戦が終わった後の祝  
いで乾杯の合図をした

「師匠…私どうでした?」

この師匠含めて4人パーティの唯一の女であり片手剣を使  
うローが、早速酔ったのか師匠に擦り寄りながら質問をした、その  
時、このドンドルマの酒場にいた数多くの女性がローに向けて嫉妬  
と殺気などの負の感情のこもった目を向けた……だが、そんなことなど  
そよ風の如く気にしないでそれでも質問を続ける。師匠は女性に人  
気はあるのだが、本人が鈍感なせいかそういうのに全く疎いのだ

「ああ、前回に比べると良くなってる。だが、お前の癖である熱くなる周りが見えなくなるのは何度注意しても治らん」

因みに前世の僕ことヴェルダーはランス、190を超える師匠よりも高い巨漢の男ゼリオスが大剣、さっきの白髪の女性が片手剣、そして師匠は基本的に全部使えるがよく使うのが太刀である。師匠が酒の席で「ガンナーがいけない」というと、ーは直ぐに弓の練習をし始めたということもあるがそれはまた今度

「師匠…俺は、どうでした？」

「ゼリオスは大剣の威力はいいが、力を込めすぎだ、あれでは隙も生まれるし剣にダメージがいく、明日そこら辺を改善するためにコツを教える」

「ありがとうございます」

ゼリオスは武人氣質なので、常に強さを求めている。だが、うちの団員のよう己を顧みず突撃するのではなくちゃんと状況を理解して行動し休むときは休むをしているので着実に強くなっていった

「私も師匠が編み出した狩技の習得したいです」

「それいいが、この前出した課題は終わったのか？」

「う………まだ、終わってないです」

パーティの者達は笑い、励まし、日々精進して、強くなっていった

………そう、あの時が来るまでは

師匠は突然、姿を消した

なんの痕跡もなく忽然と消えたのだ、もちろん僕たちもギルドの者達も探した…そして、少し入った情報で古塔に行ったという話が上がった

僕たちはそこに向かうとそこには…師匠が持っていた御守りが落ちていた

僕たちは泣いた、師匠の身に何かあったが何も出来なかった僕たち

を悔やんだ

それからは更に我武者羅に力をつけていった

僕はHR345で

ゼリオスはHR350

ローはHR360となった

そこからは覚えていない…恐らく寿命で死んだのだろう

(師匠…：貴方は今、何処にいるのですか…)

「ハ！」

僕は起き上がるとそこはギルドに特別に設けられた重傷者を寝かせている部屋だった

「…ここは…ウツ…：そうか、僕はあの男に…：だが、今思い出した、技術も知識も…あの男のLevelは7相当、本来なら勝てないが、それくらい師匠から学んだ。強者への戦い方…：」

僕は体に巻かれていた包帯を脱ぐと近くに置いてあった服を着て、ドアを開けた

「あ！勇者！」

確か、ミイシャだったかな？

「ミイシャさん。あの男は…」

僕がそう聞くと、ミイシャさんは顔をしかめたが直ぐにこちらを向いた

「今、オラリオに来たばかりの方が戦っています」

「な!？」

僕は驚きが隠せなかった、それもそうだろう。オラリオに来たばかりということとは恩恵を刻んでいない。刻んでもLevel1荷

が重いという以前に蹂躪されるだけだ…

「今、そいつらは何処に！」

「は、はい！オラリオの東門より先にある平原にて戦っていると思われます！」

「クッ！」

！  
僕は駆け出した、どうか、無事でいてくれ！名も知らぬ勇敢な者よ

門に近づいていくとそこには人だかりができており城壁にも何十何百どころか千以上はいるんじゃないだろうか、というほどの人がいた

僕が人だかりを抜けて先頭に出ると、僕は言葉を失った

何キロも離れているがそこには後方にリヴェリア達がおり…黄金の波紋を既に展開している、あの男とその真ん中にある……ッ!!??

僕は言葉だけではなく心までまるで鷲掴みされたように衝撃が襲った

あり得ない…あの鎧は…師匠がよく装備している黒炎王の防具……

!!!!  
「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
「「「「「」」」」」」

!?

僕は頭の中が真っ白になった事で思考が停止しておりそこから幾分かな時間が経ったようだ、僕は鎧の人が戦っているところに目を向けるとそこには、地に倒れ伏したあの男と、鎧の人に抱きついてる3

人の女性がいた

(確認しないと、あの鎧の人が師匠なのか。別人なのか……)

僕は少しの希望を持って歩みだすと

「俺も行くぞう」

オラリオ最強の冒険者、『猛者』オツタルがいた……少し、懐かしい  
気配を感じたのは何故だろう

それから、ヘファイストスファミリア、ダイアンケヒトファミリア  
などと続々と冒険者も僕たちと同じく歩みだした

ある程度近づくと、鎧の人は兜を脱いだ

「!!?!」

隣のオツタルも息を飲む音がしたが、そんなの気にしない……いや、  
聞こえないくらい僕は目の前の光景を目に焼き付けた、青みがかつた  
白髪に優しげな碧い瞳……そして、あの人の

「ふう、終わったな」

間違いない、この声は間違いなく!

「し、師匠?」

「ん?……!」

鎧の人が、いや、師匠が此方を振り向くと、一瞬目を見開き

「……ゼリオスとヴェルダーか?」

その時、僕の心に暖かい炎が灯るのを感じた、あの時、消えた貴方  
を追って何年、何十年と探した、古塔で御守りを見つけた時、もう師  
匠は……と、絶望して心が冷えたのを感じた……だけど、今、僕の心  
に灯ったのは少し蒼い暖かい炎だった

「師匠お!!!」

## 記憶

夢を見た

誰のかわからない……たぶん……僕〃の前世だと思う  
僕も何故これが自分の前世だとわかるのかはよくわからない  
矛盾してるでしょ？でも僕の心がこう感じてるんだ

『あの人の隣に並ぶために』

『あの人の唯一の人になる為に』

『あの人を助ける為に』

『あの人を……』

見つける為に』

それから僕はその夢を見るようになった

いや、正確には前世の記憶を見直してるといったほうがいいのかな？

最初の夢は前世の僕……いや、私かな？まあ、僕でいいか……女性だったのは驚いたけど……と、話を戻すね……僕が最初に見たのは酒場だった

『あの人』……つまり前世の僕の師匠は3人で酒を飲んでたんだ、ランス使いと大剣使い……そして、師匠が見たことのない太刀を使ってた……弟子になって聞いたらその時の太刀は赫醒刀【閃武】っていう名前だった、最近発見されたバルファルクの太刀なんだって

で、次にあったのがダレン・モーランの共闘討伐の時

僕が乗っていた砂船がダレン・モーランの攻撃で壊れて砂の上にとたところを師匠が拾ってくれた

その後は無事、ダレン・モーランを倒して、お礼が言いたくて宴会の会場にいたら……いい噂を聞かない先輩ハンターが近寄ってきて俺に酒を注ぎつけて言ってきたりして、体を触ってきたんだ、僕



が言うのも何だけど、前世の僕ってスタイル良かったんだよね……で、その先輩ハンターが無理矢理僕を連れて行こうとしたところを師匠が助けてくれたって訳……師匠……貴方は物語の英雄ですか？こんなタイミングよく現れるなんて

まじモンの英雄だった

で、お礼を言った後、師匠はその場を去ってあの時見たランス使いの人たちの所に戻っていった

そして、次に会ったのがドンドルマを襲撃してきたクシャルダオラの時

僕はその時、クシャルダオラが起こした暴風で瓦礫が落ちてきて、運悪く僕の足に落ちたんだ、そして身動きができない所をクシャルダオラがトドメを刺そうとしたところを師匠が助けてくれた

なんか、胸がキュンとなったけど……気のせい……だよな？

それから、僕が師匠に無理矢理お願いしてなんとか弟子にしてくれた、師匠が武器全般を使えるって聞いた時は師匠ってすごいなあ程度にしかなってなかったけど、師匠が見せてくれた“狩技”を見た時は胸が高鳴った……この技を習得できれば師匠に一步追いつけるって……でも師匠はもつと高みにいた、それでも僕は足掻いた、走った、転んだって走り続けた……そして、やっと師匠の背中が見えた時、師匠はこう言った

『……は、少し生き急いでるな……そう焦るな。お前が目指すものは得るものは……逃げはしない。お前を待ってる』って言うてくれたよね  
それからは冷静になって一歩一歩歩いていったけど、ちゃんと師匠の背中に見える。近づいてる。そう感じた時、私は急ぐ事なんてなかった、師匠はちゃんとそこに来てくれる。頂で待っていてくれる。そ

う思った時は更に体が軽くなった

でも、僕の悪い癖の熱くなると周りが見えなくなつて、モンスターに突撃する癖は治らなかつた……いつも師匠に説教をくらつた

でも、僕はその時……師匠に怒られる事に嬉しさを感じて、師匠と2人つきりだつた事に興奮していた

うん……前世の僕つて変態じゃん

まあ、話を戻すけど、それからは師匠と仲間、ゼリオスもヴェルダールと一緒に狩りにいった、リオレウス、ディアブロス、ティガレックスなどの大型モンスターからクシャルダオラ、バルファルク、シャガルマガラなどの古龍も倒した……かなり苦戦していつも師匠に助けてもらつたけど

それから僕たちは旅をした

英雄と呼ばれた村長がいるココット村

高所にある寒い地帯にあるポツケ村

温泉と自然豊かな事で有名なユクモ村

海の上に村を作り海とともに生きるモガの村

未開拓領域を開拓する為に作られたペルナ村

など、様々な場所を巡つては師匠はそこにいるハンター達に狩技を教えていった

そして、世界中が師匠の名を知り、英雄と呼び師匠がだんだんと活躍し人々を救う事で世界は彼を

『神の使徒』『霸王』『メサイア』と呼んだ

師匠は俺に二つ名などとそんな大層なものはいらないと言つていた

流石、師匠！謙虚さが大事だと言う事ですね！

それから、またドンドルマで過ごしている時、ゴグマジオスがドン

ドルマに向かっていると報告があった

師匠が

「なに!? 付近に火薬や弾薬が取られた、もしくは忽然と無くなったなどの報告はないか!」

と近くのギルドの人に聞くと、返答は

「はい。付近の村や町で火薬や弾薬が盗まれたと報告が上がったました」

そして師匠が

「奴は火薬と弾薬などの可燃物を主食とする! 少しでも住民を避難させる時間を稼ぐために火薬などを別のところに置いて時間を稼ぐをしてくる!」

と言つてギルドの人たちと共に大老殿へと向かつていった、もちろん僕たちもついて行つた、師匠は大長老に何かを教えて、火薬を持ち出す許可を得ると

「ゼリオス、ヴェルダー、……! 俺は時間稼ぎをするから戦う準備と住民を避難させといてくれ!」

火薬を荷馬車に乗せて師匠が引いて走り出した

何故、師匠が新たに発見されたゴグマジオスの生態を詳しく知ってるのかは疑問に思ったけど、師匠だからたぶん倒したことがあるのだろうと思つていた

その後は師匠が時間稼ぎをしてる間に住民を避難させ愛用の武器を手入れをしていると、師匠は戦闘街まで引きつけてくれた、これで撃龍槍と巨龍砲が使える

驚いたのはドンドルマにいたハンター達が手助けをしてくれた事だ

ゴグマジオスに直接攻撃するのが僕たちで、他のハンターはバリスタを撃つて、大砲を放つて、バリスタ弾と大砲の球を補充、生命の粉塵で傷付いたら回復など、これ以上ないくらい見事な連携だった

そして、そのハンター達が全員、師匠の元で鍛えたハンター達、つまり僕たちの弟子だったと言うことだ

そして、なんとかゴグマジオスを討伐して僕たちは宴会を開いた  
ちよつと酔つて師匠に擦り寄つたけど、いいよねこれくらい  
他の女達が僕に殺気を向けてきたけど、これくらいラージャンやイ  
ビルジョーに比べるとそよ風みたいだ

そして、その次の日

師匠は姿を消した

### 《とある村》

そこには村の入り口に何人もの人が集まって、出立する男の子を見  
送る者達が集まっていた

「ベル…ほんとうに行くのじゃな？」

僕の育ての親のお爺ちゃんが心配そうに聞いてきたけど

「うん！僕はオラリオに行くよ」

僕はある噂を聞いて、オラリオに向かう事にした

「………わかった、それなら行ってこいーベル！」

お爺ちゃんはよく、「ハーレムを作つてこい」なんて言ってくるけ  
ど、そんな事はどうでもいい

「うんー行つてきまーすー」

「「行つてらっしゃい!!」」

僕は村のみんなの声を聞きながらオラリオに足を進めた

ある目的のために  
あの人に会うために

『待っててね。師匠：今行くから』  
今この時、もう1人の弟子も動き出した

「!?」

「どうしました、師匠？」

「いや、なんか悪寒が」

同時刻である男が冷や汗を流していたが、理由は誰も知らない

## 再会

「師匠お!!」

2人の男が俺に向けて突進してきた

「おい!待て!ぶつか!ゲボオア!!」

2人は減速することなく俺に突撃してきた、1人なら問題なかったが2人同時だと流石に無理だった

「師匠もこの世界にいたんですね!」

!!?やべえ!その単語はやばい!

「ヴェルダー!その言葉はまずい!……こっちにこい!お前もだゼリオス!」

俺は2人の首根っこを掴むと急いでその場を離れた、途中

「ヴェルダー?ゼリオス?…誰のことだ?…フィンに向かってヴェルダーと呼ぶなど…しかもあのオツタルにもゼリオスと呼び引っ張っていた…一体何だと言うのだ…」

リヴェリアが疑問を呟いていたが、出来るならその言葉は忘れてほしい。そして他の人達もこっちを凝視するな

「し、師匠?一体どうしたのです?」

「……ヴェルダーなんだよな?」

俺は姿は変わっているが口調も気配もヴェルダーと同じ金髪の小人族に尋ねた

「はい!こんな姿になってますが、師匠の一番弟子のヴェルダーです!…そんなことより師匠もこの世界にいたのですね?!探しましたよ!あの世界から師匠が消えて、僕たちは何年も探したんですよ。結局見つけることは出来ず朽ち果ててしまいました!……ですが!また会えたので嬉しいですよ!」

ヴェルダーは口早に言葉を投げかけた

「俺も…師匠とまた、会えて良かった…です…」

今度ばゼリオスが、言葉は少ないが、嬉しいという感情を溢れさせながら言葉を発した……よく見れば何故かある耳をピクピクと嬉しそうに揺らしていた

「はあ……俺もまた会えて良かった、しかしお前達もこの世界に来ていたとはな……いつからお前達は来たんだ？」

「僕は40年ほど前から」

……………は？

「俺は32年ほど前から」

……………は？

「……………は？」

「？……………どうしました？……………そういえば師匠は全く姿が変わってませんね。姿を消した時と同じ姿……………ん？……………まさか!？」

「……………ああ……うん……俺はあの世界から姿を消した時にこの世界から来たんだ」

「……………は？」

\*……………は？が多くてごめんなさいby作者

「……………え？嘘……ですよ？……………だってあれから僕からすると100年近く経ってるんですよ……………しかもよく考えれば『猛者』……君がまさかゼリオスとは」

「……………それはこちらと同じだ……『勇者』……お前がヴェルダーとはな」  
なぜか2人で睨み合ってるが今は気にしない

「……………そうか、どうやらかなりの時間のズレがあつたようだな……」  
まさか、俺が転移したのは数日前だが、あの世界では何十年と経ち、更にこの世界も40年近くのズレがあつて俺はこの世界に来たのか  
ん？……………変だな……ミラはちゃんと俺の事の記憶を消したはずだが  
……………なんで、こいつらは覚えてるんだ？

「……ところでだ……お前たち」

「はい、なんですか？」

さつきまで睨み合ってたのに2人ともこちらを瞬時に振り向いてヴェルダーは満面の笑みで、ゼリオスはいつも通り仏頂面だが、耳はピクピクしてる

「お前たちは何故俺を覚えてるんだ？」

「……その事ですか……最初は僕たちも師匠のことは忘れてました……弟子失格ですね。師匠の事を忘れるなんて」

哀愁漂いながら俯いたヴェルダー

「……思い出したのは師匠の事を忘れて、数日後に思い出しました……今は手元に無いですが……師匠が渡してくれたあのネックレスで」

……あれか

『お前達にこれをやる』

俺があの世界にいた時、4人でキャンプを張って、焚き火の前で座っている時

『これは……ネックレス？』

俺は3人と同じネックレスを渡した……あの世界では愛、情熱、勇氣、力を示す2つの宝玉……【火竜の紅玉】【雌火竜の紅玉】を嵌め俺らが4人で初めて倒した古龍の【鋼龍の宝玉】を嵌めたネックレスを渡したのだ……

『意味は知ってるな？そして俺らが初めて倒した古龍の宝玉だ……それをお前達にやる……』

愛は――

力はゼリオス

勇氣はヴェルダー

情熱は俺



『……いつか…俺がいなくなっても。それを見て…俺を俺が教えた技術を知恵を…思い出してくれ。そしてこれは俺らの証だ』

そう言つて俺は3人に渡したのだ

「それを見たとき、僕たちはまるで霧が晴れたように師匠を思い出したんです……」

「……そうか……覚えててくれてありがとうなヴェルダー、ゼリオス」  
「…あれは師匠がくれた大切な物だから肌身離さず持っていた」

「そうか、そんなに俺を想っていてくれたのか……師匠名利に尽きるな」

「それとだ…お前達…俺を師匠なんて呼ぶな。聞けばお前らはどちらもオラリオ最強のファミリアの団長なんだろう？その2人が師匠と呼ぶ奴が現れたら余計なことになるじゃ無いか」

「それだったら師匠だつて、僕達の事をヴェルダーとゼリオスって呼んでるじゃ無いですか…今の僕の名前はフィン・ディムナです」  
「俺はオツタル…」

「転生してるんだから名前が変わるのは当たり前だよな……俺は前世の名は龍人《りゅうと》で、あの世界で名付けられたらリユートだったかな」

「そうか、だったら余計な混乱を招かないように俺の事はリユートって呼んでくれ」

「無理です(だ)」

「即答かよ!？」

「最低でもさんは付けさせてもらいます」

「なら俺は兄者と呼ばせてもらう」

この2人は……

「…はあ、わかったそれでいい」

少なくとも師匠よりはマシだろ

「まだ話したいことはあるが、そろそろ戻ろう。人々の目がだんだん痛くなってきた」

もう殆どの人がこっちに目線向けてるよ

「フィン…さつきリユートがお前の事をヴェルダーと呼んでいたが、あれはどういう事だ？しかもお前もリユートの事を師匠と」

早速来やがった

「あはは…気にしないでくれリヴェリア。昔リユートさんに稽古疲れもらった時があったからその時の癖で師匠って呼んだんだ、ヴェルダーはその時の偽名さ」

よし、なんとか適当な嘘で誤魔化せるかな？

「……そうか」

ところでだ……さつきから俺に凄い熱っぽい視線を浴びせてくる服装が薄い子がいるんですが……

「…リユートさん……」

やだ、凄く艶かしい……ちよいと胸部装甲が薄いのが、そして俺を凝視する4名……金髪のエルフと茶髪のエルフ×2、金髪のヒューマン……俺が何をした？……あ、暴れましたね……テへ☆

「し……んん！リユートさん……そろそろ戻ろうか……僕たちの主神にも会わせたいから」

ヴェ……フィンの主神？……確かロキだったな？悪戯の神やラグナロクで有名な神ですね……どんな感じだろうか……やっぱり

『グハハハ!!このオラリオもいずれ終焉をむかえさせてやるう!』野太い声

「的な感じかな?……斬るか

「わかった、俺の主神達もいいかな?」

ミラとルカとアスも連れて行かねえと

「主神というと……リユートさんの後ろにいる白髪の人かな?黒髪の人と紅い髪の人たちは……主神の姉妹かな?顔似てるし……まあ、大丈夫だよ」

それから俺たちはオラリオの住人や他の冒険者の人たちから尊敬、憧れ、恐怖、奇異などの視線を浴びながら移動していた

「……………でだ、フィン」

「……………なにかな?」

俺とフィンがなんとも言えない雰囲気を出しながら後ろにロキ・ファミリアの団員達+αを連れながら俺は自分の右腕を見た

「……ん?どうしたの?」

さつき俺に凄く艶っぽい視線を向けながら首を傾げるアマゾネス

……ティオナ・ヒリユテ

そしてそれを凝視するフィン、歯をギリギリしながらこちらを見るミラとルカ、呪い殺しそうな黒いオーラを出しながらこちらを無表情な顔で見つめるアス……何故か俺をずっと見つめる金髪の子、そしてそれを見て苦笑する他の方々

「そういうえば、ギルド職員と豊饒の女主人の店員がなんで一緒にいるんだい?」

ん?……あ、ちょっと耳が短いエルフと金髪のエルフの事かな?

「え、えつと……わ、私はギルド職員としてこの人を見極めなくてはいけなくて」

「……………私はお礼は言いましたが、流石にお礼だけじゃ感謝しきれないので何か役に立たないかと思いい」

へえ……うん、まあオラリオの最強の冒険者達が負けた相手を倒した人が危険だとは思うけどさ……ちよいと心にくるな。そしてエルフさん……特になにもないですね

「変だね。ギルドはそんな事しないはずだけど？」

「うー！」

あらう？ そうなんだ

「はあ…正直に言ったらどうだ、エイナ」

「……はい……」

おや、こちらに近づいてなにかな？

「えつと……リユートさん……あ、ありがとうございます！」

「……うん。どういたしまして」

「ツー」／／

「…(流石師匠、あの世界では裏で『リユートさんに踏まれ隊』『リユートさんに見下され隊』『リユートさんに抱かれ隊』などなどやばい団体が出来てるほどだね……全く、師匠はいつも女性に対して節操が……ブツブツ)」

「…あの」

うん？

「えつと、君は？」

さつきからこちらを見つめてた金髪の子が話しかけてきた

「アイズです。その……えつと……」

……う、うーん…なんだろうか…

「……私を…鍛えてくれませんか？」

うん？

「……えつと、アイズ？それはリユートさんの弟子になりたいってことかな？」

「……うん…リユートの剣、綺麗だった…鍛えてもらえれば…私は…強くなれる……それに……」

それに？

「…や、やっぱりなんでもない!」

「……うーん…あ、もしかして狩技の事かな?…色々やばい狩技も作っただけど…まあ大丈夫でしょ、この子なら

「うん、いいよ。鍛えてあげる」

「ほ、本当?」

「やだ、美少女の上目遣いとか結構きます!

「本当」

「よかった」

「あれ?そういうえげつないオツタルは?」

「あれ?そういうえげつないね…」

「いつのまにか消えていたオツタル…用事かな?」

「フレイヤ様!ご無事ですか!」

「ここはバベルの塔の最上階、オツタルはここに来ると窓に手を当て、どこかを見つめている。美女がいた、彼女はこのオラリオの2大派閥の1つ、フレイヤ・ファミリアが主神フレイヤ

「ねえ、オツタル」

「はい」

「彼…なんていうの?」

「彼と、申しますと…師s…兄者の事でしょうか?」

「兄者?…彼、猪人には見えないけど」

「兄者は私を鍛えた恩人です」

「そうだったの……欲しいわあ……見たことのない魂、透き通っているのに黒く明るい。まるで夜に輝く月のように……英雄のように赤く情熱的で、戦士のように荒々しくて、優男のように蒼く……そして、私たち神のように神々しい魂……あの男から救ってくれた彼にお礼を言いたいし今度会って見ましょう。そして彼を私の側に……」

「…（師匠……流石に美の女神まで惚れさせるのはまずいと思います）」

「いや、俺なにもしてないが」

「うん？どうしたの？」

「いや、なんでもない……それと……当たっているのだが……」

「うふふ……当ててんの」

まさか現実でその言葉を聞くとは!!